

修 士 論 文 要 旨

学籍番号 22GH103 第 号

氏 名 工藤 学

人文社会科学 専攻 (コース:文化芸術)

論文題目

五所川原須恵器の分布からみた津軽の古代集落の形成とその背景

青森県圏域を含む北緯40度以北の東北北部は、7世紀から11世紀にかけては郡制未設置の地域であり、国家による武力制圧や朝貢の対象とされていた。この時代のこの地域は、いわゆる蝦夷が住む地であり、政治的、社会的実態についてはほとんど知られていない、日本国の外である。

9世紀から11世紀にかけて、この地域は爆発的な集落数の増加や各種産業の飛躍的な向上、隣接地域との交流が活発化するなど経済的な発達をみた時期である。

青森県五所川原市に所在する「五所川原須恵器窯跡群」も、その盛行する各種産業の中の一つと位置づけられている。須恵器は日本国で自然発生的に生まれたものではない。5世紀に朝鮮半島から伝来したとされている。北部九州から瀬戸内海沿岸、畿内にまで伝わり、年代を経るにつれ全国に広がっていくが、津軽の五所川原に窯が開かれたのは9世紀末頃で10世紀末頃まで続いたとされている。

本研究は、この五所川原須恵器の流通・分布とこの時代の特性の一つである集落数の激増が関係しているのではないかとの視点に立ち、進めたものである。五所川原須恵器を含めた須恵器の流通・分布の状況と集落形成とに何らかの関係性が見て取れれば、当時の社会状況が浮かび上がってくると想定するからである。

第1章では研究の目的と方法を提示した。青森県内でこれまで発行された埋蔵文化財発掘調査報告書から、須恵器が出土した遺跡と五所川原須恵器を含む須恵器、土師器を抽出し、青森県域を各地区ごとに分け、年代ごとに集成し分析していく方法について述べている。

第2章には研究史と課題を提示した。五所川原須恵器についてはこれまで様々な角度からその把握が試みられてきた。窯跡の発見の経緯やこれまでの主な発掘調査の概要、編年や年代観、分布と流通、五所川原須恵器の系譜や開窯・廃絶の社会的背景など、先行研究には様々ある。先学の先行研究に触れ、現状と課題について整理した。

第3章では、集成した結果と分析について提示している。地区ごと、年代ごとに遺跡数や須恵器量、土師器量などをグラフにまとめ、分析を加えたものである。また、五所川原須恵器の系統や五所川原須恵器ではない須恵器（非五所川原須恵器）の数量等についても整理し、検討を加えている。

第4章には考察を提示した。遺跡数と自然・社会イベントとの関係やその背景、五所川原須恵器の集落への関与の度合い、五所川原須恵器窯の性格や開窯・廃絶の経緯などの考察から、五所川原須恵器と関係が深い「特定の集落」や民の移動、津軽平野の開拓について示し、まとめている。

キーワード：須恵器、集落、民の移動、開拓